

国学院大学経済学部「演習ⅢB」卒業論文(担当教員 小木曾 道夫)

Jリーグの歴史と今後

経済学部経済学科 中村 友哉

内容

はじめに	1
第1章 Jリーグの歴史	3
第1章第1節 通史	3
第1章第2節 変化	5
第1章第2節第1項 Jリーグ開幕	6
第1章第2節第2項 勝ち点制の採用	6
第1章第2節第3項 J1・J2の2部制を採用	6
第1章第2節第4項 レギュレーションの変化	7
第1章第2節第5項 1ステージ制への移行	7
第1章第2節第6項 J3の創設	7
第1章第2節第7項 リーグ戦方式の変化	8
第2章 Jリーグの成長	8
第2章第1節 経済的な成長	8
第2章第2節 リーグレベルの成長	11
第3章 Jリーグの今後の発展と日本サッカー界における役割	12
第3章第1節 Jリーグの今後の発展	12
第3章第2節 Jリーグの日本サッカー界における役割	13
第4章 まとめ	13
【参考文献】	14

はじめに

私の卒業論文のテーマは「Jリーグの歴史と今後」である。日本プロサッカーリーグ(以

下、Jリーグ)が1993年に開幕してから2023年で30周年を迎えたが、開幕から今日に至るまでJリーグがどのように成長し、そして今後どのように発展して、日本サッカー界にとってどのような役割を担っていくのかを論じていく。

まず私がこのテーマについて研究するに至った背景について述べていく。近年、日本サッカーの成長は目を見張るものがあり、実績としてはFIFA World Cup Russia 2018(以下、ロシアワールドカップ)とFIFA World Cup Qatar 2022(以下、カタールワールドカップ)の2大会連続でベスト16に進出している。特にカタールワールドカップでは過去に優勝経験を持つドイツ連邦共和国(以下、ドイツ)とスペイン王国(以下、スペイン)を撃破している。日本代表が目標としている初のベスト8進出は達成できなかったが日本サッカーは着実に成長していると言える。その成長の一つの要因として挙げられるのが海外でプレーする選手が増加していることである。表1から年を経るごとにサッカー日本代表における欧州サッカーリーグチームの経験者数が増えていることが分かる。13年前のFIFA World Cup South Africa 2010(以下、南アフリカワールドカップ)以前では日本代表のうち海外でプレーしている選手は5人前後、経験者数も10人に満たないほどの人数だった。しかしロシアワールドカップでは海外組が23人中15人、カタールワールドカップでは26人中21人となっている。(2023 SOCCER MOVE)。また今までの日本代表の選手は全員がJリーグでのプレー経験があり、Jリーグを経験して海外にステップアップしている。近年はJリーグを経由せずに高校や大学から直接海外のクラブへ進む選手も出てきているが、それほど数は多くなく、日本代表に選ばれるほど活躍している選手もいない。そこでJリーグが日本サッカーにおいてどのような役割を果たしているのかということに関心を持った。Jリーグ成長の歴史や今後の展望を研究することで知識を深めていきたいと考えている。

表1 各ワールドカップの日本代表メンバー内訳

開催年	開催国	サッカー日本代表選手数	欧州サッカーリーグチーム経験者数	Jリーグ経験者数	SOCCER MOVE(2023)の海外組人数	SOCCER MOVE(2023)の国内組人数
1998	フランス	22	0	22	0	22
2002	日本・韓国	23	5	23	4	19
2006	ドイツ	23	9	23	6	17
2010	南アフリカ	23	8	23	4	19
2014	ブラジル	23	14	23	11	12

2018	ロシア	23	17	23	15	8
2022	カタール	26	22	26	21	5

出典：オリンピックチャンネル編集部(2022)、SOCCER MOVE(2023)をもとに筆者作成

第1章 Jリーグの歴史

この章ではJリーグのこれまでの歴史について知識を深めていく。まず初めにJリーグの大まかな歴史を年表で振り返り、次に大きな出来事について一つずつ細かく研究していく。

第1章第1節 通史

この節では年表を用いてJリーグの大まかな歴史を振り返っていく。またJリーグの歴史とともに日本代表の主な出来事も振り返り、Jリーグとともに日本サッカーがどのように成長してきたのかを確認していく。

表2 Jリーグとサッカー日本代表の歴史

1992	<ul style="list-style-type: none"> ● Jリーグ事前大会の「Jリーグヤマザキナビスコカップ(以下、ナビスコカップ)」が開催。 ● 日本代表がAFCアジアカップ(以下、アジアカップ)で初優勝。
1993	<ul style="list-style-type: none"> ● Jリーグ開幕(10チーム、2ステージ制)。「Jリーグ」が新語・流行語大賞で年間対象に選ばれる。 ● 日本代表が「ドーハの悲劇」でワールドカップ初出場を逃す。
1994	<ul style="list-style-type: none"> ● Jリーグに2チームが加わり、12チームに。 ● 日本サッカーの発展に貢献したジーコが引退。
1995	<ul style="list-style-type: none"> ● Jリーグに2チームが加わり、14チームに。 ● 勝ち点制を採用。
1996	<ul style="list-style-type: none"> ● Jリーグに2チームが加わり、16チームに。 ● オリンピックの影響で初の1ステージ制で行われる。 ● 2002年に日韓共催でワールドカップを行うことが決定。
1997	<ul style="list-style-type: none"> ● Jリーグに1チームが加わり、17チームに。 ● 2ステージ制に戻る。 ● 日本代表のワールドカップ初出場が決まる。
1998	<ul style="list-style-type: none"> ● Jリーグに1チームが加わり、18チームに。 ● 経営難によりオリジナル10の横浜フリューゲルスが横浜マリノスに吸収合併される。

	<ul style="list-style-type: none"> ● 日本代表初のワールドカップは3戦全敗に終わる。
1999	<ul style="list-style-type: none"> ● J1・J2の2部制(J1:16チーム、J2:10チーム)、昇降格を導入。 ● リーグ戦でのPK戦を廃止。
2000	<ul style="list-style-type: none"> ● J2に1チーム加わり、11チームに。 ● 日本代表がアジアカップで2度目の優勝。
2001	<ul style="list-style-type: none"> ● J2に1チームが加わり、12チームに。
2002	<ul style="list-style-type: none"> ● FIFA World Cup Korea Japan 2002(以下、日韓ワールドカップ)が開幕。日本代表は初のベスト16に進出。
2003	<ul style="list-style-type: none"> ● Jリーグで延長Vゴールを廃止。
2004	<ul style="list-style-type: none"> ● J1・J2入れ替え戦を初実施。 ● 森本貴幸がJリーグ最年少出場記録を更新(15歳10か月6日)。 ● 日本代表がアジアカップで3度目の優勝。
2005	<ul style="list-style-type: none"> ● J1が1ステージ制に変更。 ● J1が18クラブ、J2が12クラブに増加。 ● 第11節にJ1通算1万ゴールを記録。 ● J1通算入場者数が5000万人を突破。
2006	<ul style="list-style-type: none"> ● J2に1チームが加わり、13チームに。 ● 日本代表の3度目のワールドカップは1分2敗でグループステージ敗退。
2007	<ul style="list-style-type: none"> ● 浦和レッドダイヤモンズ(以下、浦和レッズ)が日本勢初のAFC Champions League(以下、ACL)優勝。
2008	<ul style="list-style-type: none"> ● J2に2チームが加わり、15チームに。 ● ガンバ大阪が日本勢2年連続となるACL優勝。
2009	<ul style="list-style-type: none"> ● J2に3チームが加わり、18チームに。 ● Jリーグ公式試合の通算入場者数が1億人を突破。 ● 経営危機に陥った大分トリニータにJリーグが6億円の融資を決定。
2010	<ul style="list-style-type: none"> ● J2に1チームが加わり、19チームに。 ● J1・J2の通算入場者数が1億人を突破。 ● 日本代表が南アフリカワールドカップで2度目のベスト16に。
2011	<ul style="list-style-type: none"> ● J2に1チームが加わり、20チームに。 ● 東日本大震災でJリーグは7週間中断、チャリティーマッチを開催。 ● 日本代表がアジアカップで4度目の優勝。 ● 女子日本代表がワールドカップで初優勝。
2012	<ul style="list-style-type: none"> ● J2に2チームが加わり、22チームに。
2013	<ul style="list-style-type: none"> ● Jリーグ20周年。

2014	<ul style="list-style-type: none"> ● J3(11チーム+JリーグU22選抜)が開幕し、Jリーグが3部制に。 ● J1の通算入場者数が1億人を突破。 ● 日本代表がワールドカップでグループステージ敗退。
2015	<ul style="list-style-type: none"> ● J1が2ステージ制に変更。 ● J3に1チームが加わり、13チームに。
2016	<ul style="list-style-type: none"> ● J3が13チーム+3クラブのU23チームで開幕。 ● JリーグがDAZNとの10年間にわたる放映権契約を発表。 ● ナビスコカップがJリーグYBCルヴァンカップ(以下、ルヴァンカップ)に名称変更。
2017	<ul style="list-style-type: none"> ● J1が1ステージ制に変更。 ● J3に1チームが加わり、17チームに。 ● 第8節にJ1通算2万ゴールを記録。 ● 三浦知良がJリーグ最年長ゴール記録を更新(50歳14日)。 ● 久保建英がJリーグ最年少ゴール記録を更新(15歳10か月11日)。 ● 浦和レッズが10年ぶりにACL優勝。
2018	<ul style="list-style-type: none"> ● ヴィッセル神戸がアンドレス・イニエスタを獲得。 ● 鹿島アントラーズがACL初優勝。 ● 日本代表がロシアワールドカップで3度目のベスト16進出。
2019	<ul style="list-style-type: none"> ● J1年間入場者数が600万人を超え、史上最多を記録。 ● J3に1チームが加わり、18チームに。
2020	<ul style="list-style-type: none"> ● Severe acute respiratory syndrome coronavirus 2(以下、新型コロナウイルス)の影響による試合の中断。 ● 「昇格あり・降格無し」の特例ルールを決定。
2021	<ul style="list-style-type: none"> ● 三浦知良がJ1最年長出場記録を更新(54歳12日)。 ● VARを完全導入。 ● J3でJリーグ初の女性主審が担当。
2022	<ul style="list-style-type: none"> ● 日本代表がカタールワールドカップで4度目のベスト16進出。
2023	<ul style="list-style-type: none"> ● Jリーグ30周年。

出典: Japan Football Association(平成史)、Sposuru(2023)、Jリーグ(1993~2022 歴史)をもとに筆者作成。

第1章第2節 変化

この節では前節で挙げたJリーグ全体の歴史から特に大きな出来事を一つ一つ細かく確認し、どのようにJリーグが変化してきたのかを研究していく。

第1章第2節第1項 Jリーグ開幕

2024年から31年前の1993年5月15日にJリーグは開幕した。Jリーグ開幕時のチームは鹿島アントラーズ、浦和レッズ、ジェフユナイテッド市原(現ジェフユナイテッド市原・千葉)、ヴェルディ川崎(現東京ヴェルディ1969)、横浜マリノス(現横浜F・マリノス)、横浜フリューゲルス、清水エスパルス、名古屋グランパスエイト、ガンバ大阪、サンフレッチェ広島の10チームで、この10チームは「オリジナル10」と呼ばれている。

大会のレギュレーションも現在とは大きく違っている。まずリーグ戦では2ステージ制が採用されていた。1stステージのサントリーシリーズと2ndステージのNICOSステージでそれぞれホーム&アウェイの総当たり戦を行う。そしてサントリーステージとNICOSステージの優勝チームが最後にサントリーチャンピオンシップと呼ばれる優勝決定戦を行い、年間優勝チームを決める。また順位を決める際、現在は勝ち点制を採用しており、勝利3点、引き分け1点、敗北0点となっているが当時は単純に勝利数で順位を決めていた。

現在は90分で決着がつかない場合は引き分けで終了するが、当時は完全に決着をつけるレギュレーションだった。90分で決着がつかない場合は前後半15分ずつのVゴール方式の延長戦を行い、それでも決着がつかない場合はPK戦を行っていた。上述したように単純な勝ち数で順位を決めていたため「90分での勝利」「延長Vゴールでの勝利」「PK戦での勝利」に優劣はなかった(SPORIZE Ltd. (1993))。

第1章第2節第2項 勝ち点制の採用

前項で述べたようにJリーグは勝利数で順位を決定するというレギュレーションで開幕した。しかしこのレギュレーションは1993年と1994年のみで1995年からは現在も使用されている勝ち点制が採用された。だが現在のものとは少し違っている部分もある。現在は勝利3点、引き分け1点、敗北0点となっているが当時は引き分けがなくすべての試合で決着をつけていた。そのため「90分での勝利」「延長Vゴールでの勝利」「PK戦での勝利」に3点、「PK戦での敗北」に1点、「90分での敗北」「延長Vゴールでの敗北」に0点というレギュレーションで行っていた(Jリーグ1995歴史)。

第1章第2節第3項 J1・J2の2部制を採用

Jリーグは開幕から6年間は1部制のリーグだったが1999年にJ2を創設し、J1とJ2の2部制を採用した。この年はJ1が16チーム、J2が10チームで開幕した。順位の決定方法はJ2もJ1と同じ勝ち点制だったがJ1が採用している2ステージ制ではなく1ステージ制で、ホーム&アウェイの4回戦総当たりリーグというレギュレーションで開幕した。2部制となったことで昇格・降格のレギュレーションも導入された。J1の下位2チームがJ2に降格し、J2の上位2チームがJ1に昇格するというもので、このレギュレーションが導入され

ることで優勝争い以外に昇降格争いにも注目されるようになった(Jリーグ(1999 歴史))。

第1章第2節第4項 レギュレーションの変化

第1章第2節第1項で述べたようにJリーグは90分で決着がつかない場合は前後半15分ずつのVゴール方式の延長戦を行い、それでも決着がつかない場合はPK戦というレギュレーションで開幕した。しかしこのレギュレーションも少しずつ変化し、今現在のものに近づいてきた。

まず1999年にPK戦が廃止となった。PK戦は前年までVゴール方式での延長戦でも決着がつかなかった場合に行われていたが、1999年からは延長戦でも決着がつかなかった場合は引き分けとなった。勝ち点は「90分での勝利」の場合は3点、「延長Vゴールでの勝利」の場合は2点、そして「引き分け」の場合は両チームに1点というレギュレーションに変更された(SPORIZE Ltd. (1999))。次に2003年に延長Vゴールを廃止し、90分で決着がつかなかった場合は全て引き分けに変更され、今現在のレギュレーションである勝利3点、引き分け1点、敗北0点になった(Jリーグ(2003 歴史))。

第1章第2節第5項 1ステージ制への移行

Jリーグは1996年にオリンピック開催による中断期間の影響で1ステージ制を一度行った以外、開幕から2ステージ制のレギュレーションを採用していた。しかし2004年に2005年シーズンから1ステージ制への移行が承認され、2005年からJリーグは1シーズン制となった。そのため1ステージと2ステージの優勝チームによる優勝決定戦は行われず、シーズンを通して最多勝ち点を獲得したチームが優勝という明確なものになった。この1ステージでのレギュレーションは欧州主要リーグを始め、世界各国で採用されているワールドスタンダードなものであり、Jリーグも2005年から1ステージ制を採用した(Jリーグ(2005 歴史))。

第1章第2節第6項 J3の創設

Jリーグは1999年にJ2を創設し、2部制のリーグとなった。そして2014年にJ3が創設され、今現在と同じ3部制のリーグ構成となった。2014年に発足したJ3は11クラブとJリーグ・アンダー-22選抜を加えた計12チームによって争われた。

J3を創設した理由としてJ1、J2に参入するための壁が高いことが挙げられる。その中でも「ホームスタジアム」が大きな原因となっている。J1に参入するためには1万5000人以上、J2に参入するためには1万人以上を収容できるホームスタジアムを保有していることが規定となっている。しかしその規模のスタジアムはどこでもあるわけではなく、また建設するにしても莫大な費用が掛かってしまう。そのためJリーグ参入の意欲はあっても絶望的な状況のクラブは多くあった。J3はそうしたクラブを集め、試合を行うためのリーグと

して創設された。資格要件はJ1、J2と比べて緩く、スタジアムは5000人以上、夜間照明の設備も必須ではなく、プロ選手も3人以上いればいい。J3は未来のJリーグクラブを育てるための育成機関のような役割を果たしている(Jリーグ(2014 歴史)、日本経済新聞(2014))。

第1章第2節第7項 リーグ戦方式の変化

Jリーグは2ステージ制で開幕したが2005年に1ステージ制へと移行し、世界各国が採用しているレギュレーションと同じ方式になった。しかし2015年に再度2ステージ制へと移行し、1stステージと2ndステージの優勝チームを含む最大4チームによるチャンピオンシップによって年間王者を決定するレギュレーションが採用された。世界的にリーグ戦は1ステージ制がスタンダードとされ、異論や反対がある中2ステージ制を採用した理由は、関心度の低下やスポンサー料・放映権料の頭打ちなどJリーグを取り巻く環境の悪化があった。2ステージ制にすることで優勝争いの山場を増やし、メディア露出をアップさせ、スポンサーメリットを創出することが狙いだった。

しかしこの2ステージ制のレギュレーションは2シーズンで終了し、2017年には再び1シーズン制へと移行した。2ステージ制にすることで中だるみを防ぎメディアへの露出を増やすことができたが、優勝争いの複雑やスケジュール面の問題などが原因となりわずか2年間で2ステージ制は終了した。また2016年にDAZNと10年間、総額約2100億円の大型放映権料契約を締結したことにより2ステージ制を継続する大義名分がなくなったことも理由の1つとして挙げられる(LY Corporation(2016)、Jリーグ(2015 歴史)(2017 歴史))。

第2章 Jリーグの成長

この章ではJリーグが開幕してから現在までどれだけ成長してきたのかを研究していく。経済的な面と世界のサッカーリーグと比べたときのJリーグのリーグレベルという2つの観点から調べていく。

第2章第1節 経済的な成長

この節ではJリーグの経済的な成長を表や図を用いて研究していく。

表3 Jリーグ経常収支(単位:百万円)

	経常収益*	経常費用#	当期経常増減額
1992	943	1,333	-390
1993	8,892	8,834	58
1994	10,031	10,091	-60

1995	10,400	10,474	-74
1996	8,301	8,338	-37
1997	8,016	7,993	23
1998	7,994	7,986	8
1999	7,546	7,557	-11
2000	8,009	8,005	4
2001	8,520	8,518	2
2002	11,148	11,148	0
2003	11,454	11,453	1
2004	11,789	11,527	262
2005	11,718	11,624	94
2006	12,712	12,307	405
2007	12,342	12,200	142
2008	12,845	12,595	250
2009	12,776	12,661	115
2010	12,372	12,262	110
2011	9,888	9,658	230
2012	11,910	12,031	-121
2013	11,625	12,009	-384
2014	12,267	12,519	-252
2015	13,341	12,776	565
2016	13,560	13,491	69
2017	27,331	26,368	963
2018	26,866	26,725	141
2019	27,140	27,761	-621
2020	29,818	26,459	3,359
2021	28,566	28,161	405
2022	32,031	31,438	593

出典：Jリーグ(1992～2022決算)をもとに筆者作成。

*：1992～2005年は収入合計、2006～2010年は事業活動収入計

#：1992～2005年は支出合計、2006～2010年は事業活動支出計

なお、2011年は会計期が9ヶ月(4-12月)

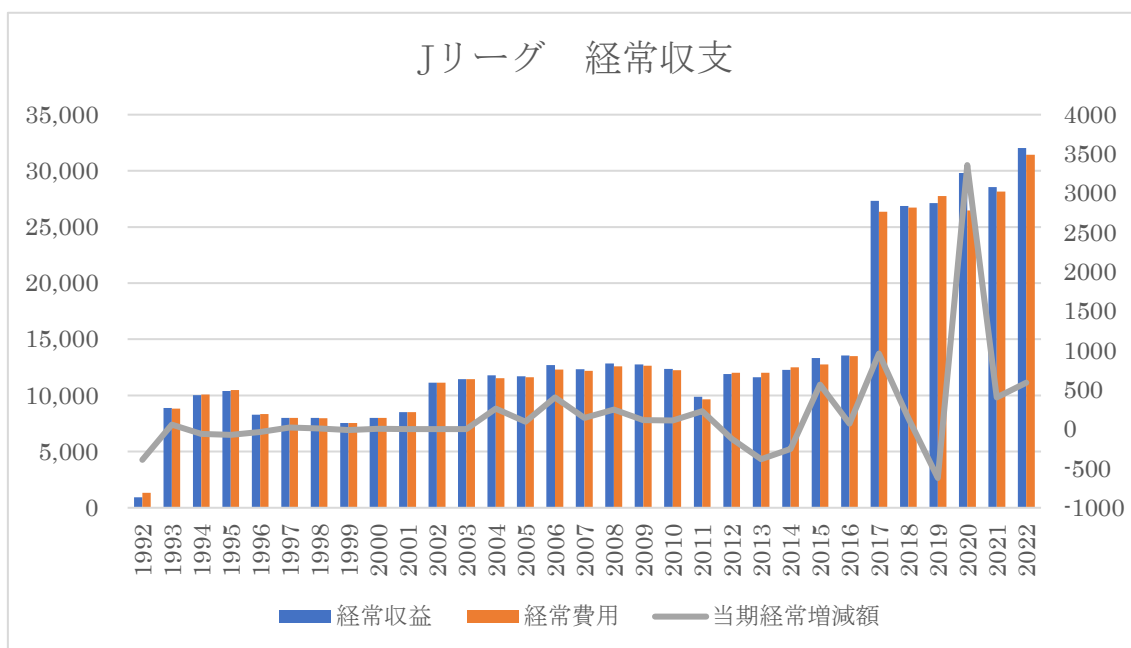


図1 1992～2022のJリーグの経常収益、経常費用、当期経常増減額(単位: 百万円)

出典: Jリーグ(1992～2022決算)をもとに筆者作成。

表3は1992年から2022年までのJリーグの経常収益、経常費用、当期経常増減額の数値である。数字だけでは分かりにくいため表3をグラフ化したものが図1である。

最初に目が行くのが2020年の経常収支の大幅な増加である。この年は新型コロナウイルスの影響でリーグ運営に大きな支障が出たにもかかわらず大幅な黒字となっている。しかしKODANSHA(2021)によると、この大幅な黒字は成長によるものではないとされている。Jリーグはコロナ禍前に承認された2020年度の予算では約13億円の赤字を見込んでいた。しかしコロナ禍の到来で大幅な見直しを迫られ、約40億円のコスト削減を断行した。またスポンサーからの追加協賛やスポーツ振興助成金などで約6億4000万円の収入増があったため約33億円という大幅な黒字になった。

次に注目すべき点は2016年から2017年にかけて経常収益と経常費用が約2倍に増加していることである。まず経常収益が増加した要因として放送権料収益の大幅な増加が挙げられる。2016年は50億5千万円だったが1年後の2017年には178億円に増加している(Jリーグ(2016決算)およびJリーグ(2017決算))。放送権料収益がこれほどまでに急増した理由は表2の年表でも記したようにJリーグと「DAZN」が2017年からの10年間で約2100億円の放映権契約を締結したためである。それまでJリーグは「スカパー！」と年間約30億円の放映権料で契約していた。しかし「DAZN」と契約を結んだ2017年以降の10年間は、年平均で約210億円となり、これが経常収益の大幅な増加の要因となっている。経常収益の増加に伴い経常費用も同様に約2倍増加している。経常費用の増加の要因の一つとしてクラブへの分配金の増加が挙げられる。2016は73億2千万円だったが2017年には137億5

千万円となっている(Jリーグ(2016決算)およびJリーグ(2017決算))。これは放映権料の増加で得た収益を各クラブに分配し、競争をさらに激化させることやJリーグのチームを世界のトップレベルのチームと同じレベルに引き上げることでJリーグの注目度を上げることが狙いだと思われる(並木(2016))。

2020年のイレギュラーな大幅黒字はあまり考えずにグラフの全体を見てみると経常収益と経常費用は1992年から2016年までは緩やかに大きくなっており、2017年に一気に成長し、その後も大きくなっている。また当期経常増減額も年によって上下しているが緩やかに大きくなっていると言える。これはJリーグが開幕から成長を続けているということではないかと考える。もちろん個別のクラブで見ると赤字になっているクラブもあると思うが、2009年の大分トリニータのように経営が難しくなっているクラブに融資ができるなど健全な経営ができていることは素晴らしいことだと考える。

第2章第2節 リーグレベルの成長

この節ではJリーグ、特に一番レベルの高いJ1リーグが世界のリーグと比べてどれほどのレベルにあるのかを研究していく。

表4 J1リーグの順位の変遷

日付	順位
2016年-2017年	48位
2017年-2018年	47位
2018年-2019年	39位
2019年-2020年	33位
2020年-2021年	32位
2021年8月1日	30位
2022年2月12日	26位
2022年7月15日	25位
2023年1月15日	26位
2023年7月16日	27位

出典：Ippo-san's diary(2023)をもとに筆者作成。

表4はKick Algorithmsが作成している世界サッカーリーグランキングでのJ1リーグの順位変遷である。Ippo-san's diary(2023)によると、この順位は代表チームの国際大会やクラブレベルの大会におけるリーグ所属選手数や出場実績、また過去16年間におけるリーグの認知度や評判などによって決定されている。単純なサッカーのレベルだけでなく、いく

つかの要素によって順位付けされているため一概に順位が上だからと言ってサッカーのレベルが高いとは言えないが、上位5位は欧州五大リーグが占めている。

J1リーグの順位は表4の通りで2023年7月16日では27位となっている。2016年から2017年の順位は48位でこの5~6年で約20位アップしたということになる。この順位の上がり方からもJリーグの成長が見て取れる。アジアのリーグで1番順位が高いのが15位のサウジアラビア、2番目は23位のカタールで、日本は3番目となっている。

この章では経済的な面と世界のリーグと比較したときのリーグレベルという2つの側面からJリーグの成長を見てみたが、Jリーグは着実に成長していると言えるのではないかと考える。ではそのJリーグが今後どのように発展し、日本サッカー界にとってどのような役割を担っていくのかを次の章から研究していく。

第3章 Jリーグの今後の発展と日本サッカー界における役割

この章では開幕から2023年現在まで成長を続けてきたJリーグが今度どのように発展し、日本サッカーにおいてどのような役割を担っていくのかを研究していく。

第3章第1節 Jリーグの今後の発展

Jリーグは開幕からさまざまな変化や発展を経て現在まで続いてきた。私はそんなJリーグの今後の変化や目指すべき目標について2つの施策に注目した。

1つ目は、2月開幕の12月閉幕という春秋制から秋春制への移行である。Jリーグは1993年の開幕から春秋制でリーグを運営してきた。しかし欧州主要リーグは秋春制を採用しており、近年はシーズンの途中で有望な選手が海外へと移籍してしまいJリーグの空洞化が進んでいた。日本サッカー界がワールドカップ優勝を目標に掲げる中、欧州各国と競い合い、代表選手が数多く所属する強力な自国リーグとするために秋春制への移行が検討されている。秋春制へのメリットとしては6~9月の暑い中での試合が減り、プレー強度のアップやシーズン途中の海外移籍が減り、欧州からの選手獲得、監督招へいがしやすくなる、などが挙げられる(The Hochi Shimbun. (2023))。しかし問題点もある。秋春制への移行の問題点として挙げられているのは「試合日程」「スタジアム確保」「JFL/地域リーグ・大学/高校の卒業選手」「移行期の大会方式」「財源の活用方法」の5つである。これらの問題点に対して明確な対策を各クラブと慎重に話し合う必要がある(Creative 2 (2023))。

2つ目は、カーボン・オフセットの取り組みである。カーボン・オフセットとは「日常生活や経済活動において避けることができないCO₂等の温室効果ガスの排出について、まずできるだけ排出量が減るよう削減努力を行い、どうしても排出される温室効果ガスについて、排出量に見合った温室効果ガスの削減活動に投資すること等により、排出される温室効果ガスを埋め合わせる」という考え方である。Jリーグはまず各試合で排出されるCO₂を把握し、その後各クラブと連携しながら気候変動対策に興味を持つ人を増やそうとしている。

Jリーグは「世界一、クリーンなリーグ」を目標としている(日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)(2022))。

第3章第2節 Jリーグの日本サッカー界における役割

この節ではJリーグが今度日本サッカー界においてどのような役割を果たしていくのかを私の考えを中心に述べていく。

私は今後のJリーグの日本サッカー界における役割の一つは、海外からJリーグに帰ってきた選手が若手選手の手本となりレベルアップをさせ、日本サッカー界を底上げすることだと考えている。第1章の表1に記したように南アフリカワールドカップの後から海外へとステップアップする選手が増えていた。このあたりの時期に海外へ出ていった選手が近年、Jリーグへと帰ってくる流れができてきている。大迫勇也(ヴィッセル神戸)や香川真司(セレッソ大阪)、酒井宏樹(浦和レッズ)など世界で活躍した選手がJリーグに帰ってきて、活躍をしている。特に2023シーズン、ヴィッセル神戸をJリーグ初優勝に導き、得点王や最優秀選手賞を受賞した大迫勇也はチームの若手選手に厳しく指導する場面もあったが、そんな若手選手がとても成長し、優勝の原動力になってくれたと語っている(DAZN(2023))。

大迫勇也はもともと静かな性格でチームに喝を入れるような選手ではなかったと言うがチームが成長するには必要だと感じたようだ。このようにレベルの高い欧州のチームでプレーしてきた選手が日本にいる若手選手に対して指導をし、基準を上げていくことはもちろんチームにとってもよいことだが日本サッカー界全体にとっても有益なことである。海外経験のあるベテラン選手から指導を受け、レベルアップした若手選手が海外へとステップアップし、日本代表で活躍をするというサイクルができるのではないかと考えているためである。前節で述べたようにいずれはJリーグが欧州主要リーグと肩を並べ、Jリーグに代表選手が数多く所属するリーグにすることを目標としているが、2~3年ですぐに達成できるものではない。そのためJリーグは上述したような役割を今後果たしていくのではないかと考えている。

第4章 まとめ

私は普段海外サッカーをメインに見ているのでJリーグの知識はほとんどない状態でこの研究を始めた。自分の生まれ育った国のリーグについてある程度は知識を持っていたという思いから研究を始めたが、研究を通してJリーグがこれまで歩んできた歴史や成長、今後の目指すべき姿を知ることができた。これまでJリーグを見ることはあまりなかったがこの研究をしたことにより少しずつ見てみようという思いがでてきた。良い選手だけでなくまだあまり知られていない若手選手を見つけて成長の過程を楽しむことや海外から帰ってきたベテラン選手がチームを引っ張っている姿など楽しみ方は数多くあると考えている。またJリーグ自体の成長も楽しみの一つである。Jリーグがいつか欧州主要リーグと肩を並

べ、各国代表選手が数多く所属するリーグになることを想像するととても楽しみである。これからもJリーグと日本サッカーの成長に注目していきたい。

【参考文献】

【凡例】

文献末尾の【表2】:「Jリーグ(1993~2022 歴史)」と総称する。

文献末尾の【表3】:本文・脚注では「Jリーグ(1992~2022 決算)」と総称する。

Ippo-san' s diary(2023年8月5日更新) 「【2023年度版】サッカーリーグランキング: Jリーグは世界で何位? - Ippo-san' s diary」 <https://www.ippo-san.com/entry/national-soccer-league-world-ranking> 2023年12月5日閲覧

LY Corporation(2016年10月13日掲載) 「2年で終わったJリーグの2ステージは一体何だったのか? (THE PAGE) - Yahoo! ニュース」 <https://news.yahoo.co.jp/articles/dcb2c9e2f28e30e207cdb7ae559d581882a9ea3d?page=1> 2023年11月7日閲覧

オリンピックチャンネル編集部(2022年7月28日掲載) 「【サッカー】日本代表、ワールドカップの歴代戦績・メンバー | 過去4度のベスト16が最高成績」 <https://olympics.com/ja/news/football-japan-fifa-world-cup>、2023年11月23日閲覧

Creative 2 (2023年11月28日掲載) 「Jリーグ“秋春制シーズン移行”案も大詰めの段階 主な検討課題は5つ…移行期の大会方式はどうか? | フットボールゾーン」 <https://www.football-zone.net/archives/491312>、2023年12月13日閲覧

KODANSHA LTD. (2021年3月8日掲載) 「Jリーグ、コロナ禍も33.5億円“大幅黒字”の経緯説明「成長による利益ではない」 | ゲキサカ」 <https://web.gekisaka.jp/news/jleague/detail/?325814-325814-fl#> 2023年12月5日閲覧

SOCCER MOVE(2023) 「【サッカーW杯】歴代日本代表の国内組・海外組の割合をポジション別にまとめてみた! 【全7大会から】 - SOCCER MOVE」 <https://move-sports.net/soccer-worldcup-japan-team/> 2023年10月15日閲覧

Japan Football Association(公表年不明) 「サッカーで振り返る平成史と、未来への展望。 | JFA | 公益財団法人日本サッカー協会」 https://www.jfa.jp/about_jfa/heisei_history/ 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Japan Football Association(平成史)」と称す)

Sposuru(2023年1月13日更新) 「【Jリーグ】歴史を解説! 1番最初の試合はどのチーム? - スポスルマガジン | 様々なスポーツ情報を配信」

<https://sposuru.com/contents/sports-trivia/j-league-history/> 2023年10月29日
閲覧

SPORIZE Ltd. (2023年8月16日更新) 「【1993年】J. league 史の教科書 | SPORIZE Ltd.」 https://sporize.jp/j-league_1993/ 2023年11月3日閲覧 (本文・脚注では「2021 SPORIZE Ltd. (1993)」と称す)

SPORIZE Ltd. (2023年8月16日更新) 「【1999年】J. league 史の教科書 | SPORIZE Ltd.」 <https://sporize.jp/j-league-1999/> 2023年11月3日閲覧 (本文・脚注では「2021 SPORIZE Ltd. (1999)」と称す)

DAZN(2023年12月7日掲載) 「ヴィッセル神戸の選手たちが大集合。スペシャルトークで大迫勇也が影の MVP として挙げた若手たちの存在「伸びてくれた」 | 内田篤人の FOOTBALL TIME (DAZN News) - Yahoo! ニュース」
<https://news.yahoo.co.jp/articles/04ca45964bcb45aab278340e2d9ce7dea1db8c23>
2023年12月13日閲覧

並木裕太(2016年8月9日)「放映権料が上がった背景と使い道。コンサルがJリーグの分配を考える。 - Jリーグ - Number Web - ナンバー」
<https://number.bunshun.jp/articles/-/826209> 2023年12月11日閲覧

日本経済新聞(2014年2月7日掲載) 「J3が映し出すJリーグと日本スポーツの未来像」
<https://www.nikkei.com/article/DGXZZ066397210V00C14A2000000/> 2023年11月3日
閲覧

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「2012年度(平成24年度)~1992年度(平成4年度) | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」
<https://about.j.jleague.jp/corporate/management/league/2012-1992/> 2023年12月1日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(1992~2012決算)」と称す) 【表3】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ(2014年3月12日掲載) 「2013年度(平成25年度)決算について」 https://about.j.jleague.jp/corporate/wp-content/themes/j_corp/assets/pdf/kessan-2013.pdf 2023年12月1日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2013決算)」と称す) 【表3】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ(2015年3月11日掲載) 「2014年度(平成26年度)決算について」 https://about.j.jleague.jp/corporate/wp-content/themes/j_corp/assets/pdf/kessan-2014.pdf 2023年12月1日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2014決算)」と称す) 【表3】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ(2016年3月9日掲載) 「2015年度(平成27年度)決算について」 https://about.j.jleague.jp/corporate/wp-content/themes/j_corp/assets/pdf/kessan-2015.pdf 2023年12月1日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2015決算)」と称す) 【表3】

- 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ(2017年3月14日掲載) 「2016年度(平成28年度)決算について」 https://about.j.jleague.jp/corporate/wp-content/themes/j_corp/assets/pdf/kessan-2016.pdf 2023年12月1日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2016決算)」と称す)【表3】
- 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ(2018年3月27日掲載) 「2017年度(平成29年度)決算について」 <https://www.jleague.jp/docs/aboutj/2017-kessan.pdf> 2023年12月1日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2017決算)」と称す)【表3】
- 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ(2019年3月14日掲載) 「2018年度(平成30年度)決算について」 <https://www.jleague.jp/docs/aboutj/2018-kessan.pdf> 2023年12月1日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2018決算)」と称す)【表3】
- 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ(2020年3月12日掲載) 「2019年度(令和元年度)決算について」 https://about.j.jleague.jp/corporate/wp-content/themes/j_corp/assets/pdf/kessan-2019.pdf 2023年12月1日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2019決算)」と称す)【表3】
- 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ(2021年3月8日掲載) 「2020年度(令和2年度)決算について」 https://about.j.jleague.jp/corporate/wp-content/themes/j_corp/assets/pdf/kessan-2020.pdf 2023年12月1日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2020決算)」と称す)【表3】
- 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ(2022年3月15日掲載) 「2021年度(令和3年度)決算について」 https://about.j.jleague.jp/corporate/wp-content/themes/j_corp/assets/pdf/kessan-2021.pdf 2023年12月1日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2021決算)」と称す)【表3】
- 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ(2023年3月16日掲載) 「2022年度決算について」 https://about.j.jleague.jp/corporate/wp-content/themes/j_corp/assets/pdf/kessan-2022_final.pdf 2023年12月1日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2022決算)」と称す)【表3】
- 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)(公表年不明) 「サッカーで振り返る平成史と、未来への展望。: Jリーグ.jp」 https://www.jleague.jp/special/heisei_history/ 2023年10月29日閲覧
- 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)(公表年不明) 「1993年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)」 <https://about.j.jleague.jp/corporate/history/j1993/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(1993歴史)」と称す)【表2】
- 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)(公表年不明) 「1994年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)」

<https://about.j.league.jp/corporate/history/j1994/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(1994歴史)」と称す)【表2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「1995年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」

<https://about.j.league.jp/corporate/history/j1995/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(1995歴史)」と称す)【表2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「1996年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」

<https://about.j.league.jp/corporate/history/j1996/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(1996歴史)」と称す)【表2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「1997年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」

<https://about.j.league.jp/corporate/history/j1997/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(1997歴史)」と称す)【表2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「1998年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」

<https://about.j.league.jp/corporate/history/j1998/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(1998歴史)」と称す)【表2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「1999年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」

<https://about.j.league.jp/corporate/history/j1999/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(1999歴史)」と称す)【表2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「2000年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」

<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2000/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2000歴史)」と称す)【表2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「2001年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」

<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2001/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2001歴史)」と称す)【表2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「2002年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」

<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2002/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2002歴史)」と称す)【表2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「2003年 | 公益社団法人

- 人 日本プロサッカーリーグ (J リーグ) 」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2003/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2003 歴史)」と称す) 【表 2】
- 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (J リーグ) (公表年不明) 「2004年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (J リーグ) 」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2004/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2004 歴史)」と称す) 【表 2】
- 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (J リーグ) (公表年不明) 「2005年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (J リーグ) 」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2005/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2005 歴史)」と称す) 【表 2】
- 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (J リーグ) (公表年不明) 「2006年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (J リーグ) 」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2006/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2006 歴史)」と称す) 【表 2】
- 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (J リーグ) (公表年不明) 「2007年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (J リーグ) 」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2007/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2007 歴史)」と称す) 【表 2】
- 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (J リーグ) (公表年不明) 「2008年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (J リーグ) 」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2008/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2008 歴史)」と称す) 【表 2】
- 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (J リーグ) (公表年不明) 「2009年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (J リーグ) 」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2009/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2009 歴史)」と称す) 【表 2】
- 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (J リーグ) (公表年不明) 「2010年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (J リーグ) 」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2010/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2010 歴史)」と称す) 【表 2】
- 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (J リーグ) (公表年不明) 「2011年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (J リーグ) 」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2011/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2011 歴史)」と称す) 【表 2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「2012年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2012/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2012歴史)」と称す)【表2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「2013年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2013/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2013歴史)」と称す)【表2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「2014年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2014/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2014歴史)」と称す)【表2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「2015年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2015/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2015歴史)」と称す)【表2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「2016年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2016/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2016歴史)」と称す)【表2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「2017年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2017/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2017歴史)」と称す)【表2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「2018年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2018/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2018歴史)」と称す)【表2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「2019年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2019/> 2023年10月29日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2019歴史)」と称す)【表2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「2020年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2020/> 2023年10月29日閲覧 (本

文・脚注では「Jリーグ(2020 歴史)」と称す【表 2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「2021 年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2021/> 2023 年 10 月 29 日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2021 歴史)」と称す)【表 2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (公表年不明) 「2022 年 | 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ)」
<https://about.j.league.jp/corporate/history/j2022/> 2023 年 10 月 29 日閲覧 (本文・脚注では「Jリーグ(2022 歴史)」と称す)【表 2】

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ (Jリーグ) (2022 年 8 月 19 日掲載) 「【公式】来年 30 周年を迎える Jリーグが目指すのは「世界一、クリーンなリーグ」 Jリーグでは全公式戦でカーボン・オフセットを実施します。: Jリーグ公式サイト (J.LEAGUE.jp)」
<https://www.jleague.jp/news/article/23075/> 2023 年 12 月 13 日閲覧

The Hochi Shimbun. (2023 年 11 月 21 日掲載) 「26 年秋春制移行が現実味、空洞化止め魅力ある Jリーグでこそ「W 杯優勝」目指せる: スポーツ報知」
<https://hochi.news/articles/20231120-OHT1T51287.html?page=1> 2023 年 12 月 13 日閲覧